

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.41

神田日勝記念美術館だより





神田日勝記念美術館館長

小林 潤

開館30周年のこの一年は、各種の事業に「周年」の冠が付いた一年であったが、冠のつかないトピックスに「神田日勝作品の新発見」を挙げたいと思う。

作品は静岡県在住のAさんが所蔵しておられた。日勝が存命の頃に父親が親戚にプレゼントしたもので、日勝没後53年のこの年に現物を実見することとなり、Aさんをご自分が高齢であることを理由に「もっと多くの人々に作品を見ていただきたい」と、寄贈を申し出いただいた。作品制作の54年後にふるさと鹿追町に舞い戻った作品は二点、冬の農村風景画とリンゴを描いた静物画で、早速昨年11月からの『第2回躍動する十勝の美術作家展』からご紹介させていただいた。

30周年記念展では、6月から1967年に日勝が参加した十勝画壇の『全十勝美術展』を再現展示し、11月からは現在十勝で活躍する作家の作品を集めた『第2回躍動する十勝の美術作家展』を開催し、50年の時を越えて十勝のすそ野に広がった美術界の比較も楽しんでいただいた。

8月からは岡田敦の写真と日勝作品のコラボレーション。どちらも人間社会で活躍した馬たちの生きた姿とその社会背景を

一年を振り返って

鑑みることの可能な展覧会として好評を博した。

8月27日の馬耕忌と9月24日の第42回鹿追町ふるさと産業まつりには、広大な小麦畑に点在する麦稈（小麦殻）ロールに日勝作品の「未完の馬」の実物大パネルを張り付け、『「未完の馬」のいる風景写真展』を行った。老若男女問わない人々が寄り合い、多彩な内容の事業展開となった。若者の社会活動・団体活動離れが顕著になる風潮にあって、美術館の関連事業として新たな地域コミュニティの動きが垣間見えたものと今後の動きに注目したい。

一方、児童生徒対象事業では恒例の馬の絵作品展、5年に一度の絵画感想文コンクールの実施、アート・キッズ・クラブでの作品作りと展覧会鑑賞などの実施により子どもたちとのつながりに配慮した。

新年度は、開館31年目となり新たな時代の新たな運営が求められるものであることを再認識し、より広い視野に立ち常に地元十勝・鹿追の地に芸術のすそ野を広げる役割としての拠点施設として各般にわたる事業展開を推し進める美術館でなければならないと考えている。

個性キラリ★小規模美術館

国内400館あまりの美術館が加盟する全国美術館会議という組織がある。そのなかに「保存研究」「教育普及」など6つのテーマによる研究部会があり、メンバーはそれぞれ関心のある部会に所属して活動することができる。

小規模館研究部会もその一つ。「小規模館」の定義はなく、建物や予算の規模、収蔵品やスタッフの数などにおいて「小規模」を自認するなら、どの館でもメンバーになれる。現在、北海道から鹿児島まで65館が名を連ねており、道内からは神田日勝記念美術館、木田金次郎美術館など5館が参加している。

「小規模館」というと何となくうらさびしい響きがあるが、そのメンバーリストを一覧するとキラリと輝く個性派美術館が多いことに気づく。作家やコレクターの個人名を冠した記念美術館が半数近くを占めるほか、やきものや木といった特定のジャンルや主題を掲げる館も散見される。また、〇〇市（町）立美術館という名称であっても、何らかのテーマに焦点を絞っている館が多い。

こうした一点集中ないしは突破型のテーマの設定は、県立クラスの大規模館のように多方面に手を広げることではできないという財政的な事情によるものであるが、結果として小規模館ならではの特色や長所を生み出すことにつながっている。

小規模館ではそれぞれが対象とするテーマに関して徹底した調査や作品収集を行い、展覧会においてもさまざまな角度から繰り返しアプローチする。やがて資料や知見が蓄積され、研究

市立小樽美術館館長

とまな 苦名 真



センターとしての位置を確立することになる。

そこへ行けば必ずお目当ての作家やコレクションが見られるという安心感もある。大きな美術館だと展示替え等で見られないこともしばしばだが、小規模館は期待を裏切らない。地域住民にとってはお気に入りの作品を繰り返し鑑賞することで、「私だけの一点」という愛着も生まれる。

テーマとする世界にどっぷり浸ることができるというのも魅力である。一人の作家を顕彰する美術館の場合、生涯の画業をじっくりたどりながら、遺品や再現されたアトリエなどを通して、その人となりに思いをはせることができる。

さらに、神田日勝記念美術館や木田金次郎美術館など作家が活動した土地に建てられた美術館では、作家と同じ風景を見、風や波の音を聞き、空気を吸い、土地の酒や料理を味わうという、作家の生きた風土を五感で体験する贅沢な鑑賞も可能なのである。

私が勤務する市立小樽美術館も小規模館研究部会のメンバーである。中村善策と一原有徳それぞれの記念ホールを持つ個人記念美術館的な性格も持つのだが、館名に個人名を冠していないため、特色が伝わりにくい。観光地にありながら観光客の呼び込みに苦戦しているところである。小樽へお越しの際はぜひお立ち寄りを。

神田日勝記念美術館開館30周年記念

「未完の馬」のいる風景プロジェクト

発端

一人の友の会会員の一言からこのプロジェクトは始まりました。

「晩夏のころ、札幌から」R石勝線に乗車、狩勝の山並みを越えて十勝平野に差し掛かるとそれまで鬱蒼とした雑木林から景色は一変します。収穫を終えた十勝の広大な小麦畑に麦稈ロールが点在する光景は絶景という以外に言葉が見当たらない程です。その光景に普段は室内に鎮座している神田日勝の「未完の馬」を解き放すとどのようになるか？さらに絶景を写真に収め全国に発信することで鹿追町や神田日勝記念美術館のPRになるのではないかと…。」

実行委員会の立ち上げ

早速の呼びかけに、若手農業者・アマチュア写真家・地元鹿追高校写真部員・主婦・カフェオーナー・ピュアモルトクラブ（地元青年活動団体）員・美術館友の会会員・美術館職員など、老若男女を問わない人々が賛同し、実行委員会の結成です。その名も、『「未完の馬」のいる風景プロジェクト』。

活動の柱は①アートな風景を作る、②日勝の追悼イベント『馬耕忌』と『鹿追町ふるさと産業まつり』との連携、③実行委員に広い年代層の参加を、と位置づけました。

撮影チームは撮影場所の選定、畑屋さん牛屋さんとの交渉、写真撮影、印刷など。展示チームは「未完の馬」の実物大パネル制作、写真展示など。広報PRチームは看板作成、インスタグラム・フェイスブックでPR、PR用風船調達、「未完の馬」の焼印が押された特製おやきの製作などの分担で動きました。

体当たりの取り組みは

春早いうちに町内農家の営農計画の情報を得て撮影畑の選定、地主さんとの交渉スタート。

町内青年たちの声に町理事者の理解とA鹿追町の協力も得られましたが、実際の収穫現場では収穫の日にちが天気次第で前後したり、麦稈ロールの配置に多くの労力を要したり。同時に馬のパネル設置など、酷暑の夏の作業は体力勝負の様相となり、体当たりの取り組みは想像を超える厳しいものでした。

写真展と麦稈ロールの遊び場設置

8月の馬耕忌と9月の産業まつりでの写真展には、延べ1,500名の観覧者を得、麦稈ロールを使った遊び場では、延べ2,000名を数える幼児・児童が楽しみました。また、「未完の馬」をあしらった風船やおやきも高校生ボランティアの爽やかな対応で「未完の馬」のアピールに大きく貢献しました。

今後に向けて

同プロジェクトの動きは若者の社会活動・団体活動離れが顕著になる現代の風潮の中で、美術館の関連活動としてまた新たな地域コミュニティ形成の一助となる貴重な取り組みと評価されます。

新年度はどのように形を変えてプロジェクトが動き出すのか期待が膨らみます。今後も町民皆様・友の会の皆様・日勝ファンの皆様の変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

（館長 小林 潤）



第31回馬耕忌に合わせた写真展示



産業まつり写真展と麦稈ロール遊び場



麦稈ロール設営の様子

第29回 馬の絵作品展

2023年10月3日(火)～10日(火)
鹿追町民ホール ホワイトホール

主催：神田日勝記念美術館 共催：鹿追町教育委員会・北海道新聞帯広支社
後援：北海道・北海道教育委員会・鹿追町・NHK帯広放送局・十勝造形サークル・
帯広市教育研究会図工美術部会・JR北海道・北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店・
帯広信用金庫・神田日勝記念美術館友の会

〈審査講評〉

今年も全国各地から熱意溢れる作品をありがとうございました。絵は何をどのように描くかが大切ですが、皆さんの作品はどれも対象となる馬をしっかり見つめ、自分なりの表現方法で一生懸命取り組んでいる姿が伺えるような作品ばかりでした。

また、馬の絵を描く時間の中で新たなものに気づいたり、考えて反省することは絵を深めていくために重要な要素になります。自分の乗馬体験や大きな馬と触れ合う様子を描いた、ほほえましい作品には心が和みました。

年々新しい技法に積極的に挑戦するなど、表現方法が多様化してきました。中でも、賞に入った作品は馬をどう表現するかの視点がはっきりしていて、大胆な構図や構成、色彩の工夫がなされ、作者の感動した気持ちがよくつたわってくるものでした。

次年度も皆さんの熱い思いを込めた作品を多数お待ちしております。
(齊藤隆博審査委員長)



文部科学大臣賞

釧路市立鳥取西中学校 3年 松尾 悠菜

表彰式

2023年10月7日(土)
鹿追町民ホール
ミュージカルホール
参加人数：19名



馬の絵作品展・絵画感想文コンクール
合同で開催された表彰式には、道内外
より多くの受賞者や晴れ姿を見に来た
ご家族にご来場いただきました。

第29回 馬の絵作品展 審査結果

入賞

- ◆文部科学大臣賞
- ◆北海道知事賞
- ◆北海道教育委員会教育長賞
- ◆鹿追町長賞
- ◆鹿追町教育委員会教育長賞
- ◆神田日勝記念美術館長賞
- ◆北海道新聞帯広支社長賞
- ◆十勝造形サークル委員長賞
- ◆帯広市教育研究会図工美術部会長賞
- ◆JR北海道社長賞
- ◆北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店長賞
- ◆帯広信用金庫理事長賞
- ◆【特別賞】ほのほの賞

釧路市立鳥取西中学校	3年 松尾 悠菜
羅臼町立羅臼小学校	5年 中谷 龍晴
中標津町立丸山小学校	5年 坂本 千慧
別海町立上西春別中学校	3年 吉本 萌夏
羅臼町立羅臼小学校	3年 中谷 六花
帯広市立帯広第四中学校	3年 受川 未紗伎
中標津町立中標津小学校	3年 澤田 晴
栗東市立葉山東小学校(滋賀県)	3年 山本 彩央
羽幌町立羽幌中学校	1年 神永 みそら
標津町立標津小学校	6年 高桑 愛美
守谷市立松ヶ丘小学校(茨城県)	1年 佐藤 花
千歳市立緑小学校	1年 平田 楓乃
取手市立戸頭小学校(茨城県)	2年 軽部 琉惺

応募点数

472点

■学年別応募数

- 《小学校》
- 1年生/31点 ●2年生/84点
 - 3年生/56点 ●4年生/84点
 - 5年生/35点 ●6年生/68点

《中学校》

- 1年生/28点 ●2年生/40点 ●3年生/46点

■地域別応募数

十勝/166点	留萌/22点	岩手県/2点
石狩/25点	釧路/56点	茨城県/43点
空知/1点	根室/10点	千葉県/2点
後志/3点		滋賀県/130点
日高/1点		大阪府/2点
檜山/1点		愛媛県/4点
上川/1点		鹿児島県/3点

巡回展

北海道中標津町

道立ゆめの森公園

2023年11月9日(木)～11月20日(月)

展示作品 入賞・入選・佳作・地域出品作品(根室管内)

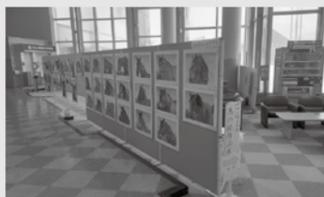


北海道苫前町

苫前町公民館

2023年12月11日(月)～12月20日(水)

展示作品 入賞・入選・地域出品作品(留萌管内)



北海道帯広市

帯広信用金庫中央支店 おびしんふれあいギャラリー

2024年1月13日(土)～1月27日(土)

展示作品 入賞・入選



神田日勝記念美術館開館30周年記念事業 絵画感想文コンクール

課題絵：《馬(絶筆・未完)》



神田日勝《馬(絶筆・未完)》1970年 当館蔵

《最優秀賞作品》

一般の部 未完の生
東京都練馬区 桐生 莉緒

この馬は神田日勝だ。絵を見た第一印象は、「半身の馬」をよく観察するほど、日勝について知るほど、深まるばかりだった。

未完成の絵は世の中にくつつもあるが、「半身の馬」ほど一目で未完成と分かる絵は他にないだろう。油絵は通常、画面全体を大まかに塗った後で細部の描き込みへと移っていく。この手順通りなら、馬は半身になるはずがない。しかし日勝は、馬の輪郭線を鉛筆で描いた後、左から右へ一歩一歩丁寧に書き進めたのだろう。動物のつやのある黒い毛は、光のあたり具合でさまざまな色を見せる。描かれた馬の頭部から前脚・胸の辺りは、赤・青・黄色の絵の具が溜み、筆触により生き生きとした毛並みが再現されている。しかし胴体は、まだ黒褐色の絵の具しか塗られていない。後ろ足も輪郭しか描かれていない。上半身は今にも動き出しそうだが、後ろ足がないから駆けることができない。そのためか、目には寂しげな表情が浮かび、少し垂垂れているようにも見える。

もちろん生命を吹きこまれる途中のようなこの絵は、日勝の高い技術を感じさせる。しかし、「半身の馬」を美術館の目玉作品たらしめているのはそういった部分だけではないように思う。むしろ、馬の見えない部分が私たちに語りかけてくるからではないか。

「未完の馬」は描かれなかった馬の体の分、日勝の描くことへの熱量が感じられる。それだけではない。未完成でも強制的に制作を終了された作品と、画家としてまだまだ成長するはずだったのに若くして亡くなった日勝。これらは非常に似ていると思う。もし日勝が道半ばで命を落とさなければ、画家としてどのような道を辿ったのか、絵の前で自然と考えさせられるはずだ。また、日勝は画家であると同時に農民でもあり、本人もそのあり方だからこそ絵を描けると語っていたという。実際、この作品も農民にとって身近な馬を描いたものだ。しかし、画業にも農業にも打ち込むという無理が祟って死につながってしまった。「半身の馬」の前足は地面をしっかりと踏み込みそうなのに、輪郭しか描かれていない後ろ足では蹴り出せない。前後の足の対比や走ることができない体が、両立の理想に敗れた日勝の無念さを物語るようでもある。

私たちも、日勝の気持ちに共感するところがあるのではないかと。私は諦めてしまった夢を思い出した。この作品は未完の生命であり、神田日勝の人生でもあり、鑑賞者の人生への鏡でもあるのだろう。

応募点数

97点

2023年10月3日(火)～10日(火)
鹿追町民ホール ホワイトホール

主催：神田日勝記念美術館
共催：鹿追町教育委員会・北海道新聞帯広支社
後援：北海道・北海道教育委員会・鹿追町・神田日勝記念美術館友の会

一般の部 〈応募数7点〉

■最優秀賞
桐生 莉緒/東京都練馬区

■優秀賞
笠原 誠司/神奈川県横浜市

■入選
芦田 晋作/東京都渋谷区
竹津 昇/札幌市

中学生・高校生の部 〈応募数90点〉

■最優秀賞
笠原 彩音
東京学芸大学附属小金井中学校 3年

■優秀賞
千葉 綾音
立命館慶祥中学校 3年
間部 賢杜
大阪府立八尾高等学校 3年

■入選
奥山 敬心
星槎国際高等学校 帯広学習センター 3年
阿部 聖羅
北海道鹿追高等学校 1年
高橋 希乃花
鹿追町立鹿追中学校 1年
中村 碧
北海道鹿追高等学校 1年
尾形 想羅
北海道鹿追高等学校 1年

《最優秀賞作品》

中学生・「生きるエネルギー」
高校生の部 東京学芸大学付属小金井中学校3年 笠原 彩音

夏休み、ネットでたまたま見つけた未完の馬をみてどきどきとした。直感でこの馬は生きていたと思った。初めて見たとき背景が何も描かれていないのに気づけなかったほど、目に惹きつけられた。深いまなざしで赤みがかった。赤はエネルギーを持った色。そのエネルギーは北海道で地と共に生きることに向かっているように思えた。この馬は未完だが未完だからこそ描かれている部分にはしっかり生きる意志がこめられていて、それがより強く伝わってくる。

そしてそのエネルギーは馬だけではなく神田日勝にもあったのではないだろうか。私は詩歌に興味があり、今は正岡子規の『病牀六尺』を読んでいる。日勝の様に病で夭折した子規は死の二日前まで新聞連載だった病牀六尺を綴った。子規は、今日の生命は病牀六尺にあり、毎朝寝起きは死ぬほど苦しいが病牀六尺が新聞に載っているのを見ると僅かに蘇ると言っている。日勝の病がどれほど苦しかったか私には分からないが、子規が自分の文章が新聞に載っているのに励まされたように、日勝も絵を描き続けることで生きるエネルギーが湧き、自分の描いた絵からもエネルギーをもらい、それをまた絵にこめていたのだろう。

未完の馬は二本の脚でしっかり立っている。強さも柔らかさも持っている未完の馬は、純粋な生きることがやきを持っている。この夏、私は未完の馬に出会い、未完の馬にエネルギーをもらった。それは私の力になるだろう。

メディア情報 (抜粋)

- 雑誌
杉本 圭吾「日勝との繋がりから見る十勝画壇」
『新美術新聞』 2023年6月1日号(通巻1632号) 編集・発行:美術年鑑社 発行日:2023年6月1日
- 北室 かず子「北海道ミュージアムグッズ紀行」
『THE JR Hokkaido』 2023年12月号(通巻430号) 編集・発行:株式会社JR北海道ソリューションズ 発行日:2023年12月1日
- 新聞記事
鈴木 斉「神田日勝 農耕馬の油絵×岡田敦さん ユリ島の馬 絵画と写真 独特の空間 鹿追でコラボ展」
『毎日新聞』 発行日:2023年8月13日
- 大下 智一「季評 美術 7～9月 発表の場と作り手 支えあう」
『北海道新聞』 発行日:2023年11月21日

開館30周年 記念展 I

会期：2023年(令和5年)6月7日(水)～
8月6日(日)

会場：神田日勝記念美術館

主催：神田日勝記念美術館

後援：鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、
鹿追町文化連盟、十勝毎日新聞社、北海道新聞帯広支社、
NHK帯広放送局、JAGA、おひろ市民ラジオFM WING

出品作品数：36点 入場者数：2,537名

よみがえる 全十勝美術展

「全十勝美術展」は、1967年2月22日から2月26日にかけて、帯広市民会館で開催された展覧会です。帯広市教育委員会と帯広市民劇場運営委員会が主催したこの展覧会は、十勝在住の全道全国規模の公募展入選者を集め、作品を広く市民に見てもらおうことを狙いとした、いわば十勝画壇の「報告展」でした*1。当時の出品目録によると26名による絵画・彫刻35点が会場に並びましたが、この中には神田日勝(1937-1970)も名を連ねていました。

報告展当時、既に札幌の全道展で北海道知事賞を受賞し、東京の独立展でも入選を果たしていた日勝は、十勝では一歩抜けた存在として見られていました。報告展を伝える地元紙の書きぶりからは日勝が日玉作家であったことが窺え、この展覧会が日勝の存在によって十勝の画家同士が切磋琢磨する場となったと考えられます。

「よみがえる全十勝美術展」は、上記報告展出品作の所在を悉皆調査し、再現展示を試みたものです。日勝存命当時の展覧会の再現を通して、当時の十勝画壇の熱気を提示すると共に、日勝と十勝画壇の作家たちとの影響関係や、戦後十勝の美術史の様相を提示しました。

*再現展示に当たって

展覧会の再現にあたって基礎となった資料は報告展の出品目録です。目録には出品者の氏名、作品種別、題名、号数、所属公募展が記されていますが、この文字のみの情報を出発点に作品の同定作業と所在調査を進めていきました。

まず、十勝における美術史を回顧する展覧会として、2011年に北海道立帯広美術館で開催された「十勝の美術クロニクル」展があります。大正期から昭和期にかけての十勝の美術を年代的に紹介したこの展覧会の出品者の中には、報告展にも出品していた作家もあり、展覧会図録は作品の同定に大いに参考になりました。

次に、十勝管内の美術収蔵施設の調査です。先述の帯広美術館のほか、帯広市の帯広百年記念館、鹿追町にも福原記念美術館といった、

十勝ゆかりの美術作品を収蔵する施設があります。また、そのほかの市町村では、例えば庁舎内の壁面や、文化ホールの応接室、あるいは公立小学校の廊下に所在する作品が市有財産・町有財産として備品台帳に登録されているケースがあり、それらの来歴調査と実見を行いました。

さらに、報告展当時の書誌資料も可能な限り調査しています。現在は廃刊となった新聞も含め、報告展を伝える地元紙の記事はもちろんのこと、各市町村の広報誌などにも目を向けます。また当時の各公募展図録には巻末に会員会友の当時の電話番号が掲載されていることがあり、電話で作家本人あるいは遺族から聞き取りを行う、あるいは後日アトリエを実見するという調査も行いました。後述しますが、十勝の美術作家は教員であることが多く、学校が発行する通信、周年誌、同窓会誌を調査し、転任先を次々辿ることで消息や現住所を特定することもありました。

以上の調査を踏まえ、再現展では、報告展の26名35点のうち、報告展出品作と同一作品の展示が日勝を含め8名9点。同一作品は叶わなかったものの、報告展出品作家の作品展示が13名13点。消息が掴めたものの、廃棄済等で作品の借用ができなかった作家が2名。消息が掴めなかった作家が3名という結果となりました。

*展示構成

章構成は、報告展の概要や再現展の意義を提示した「Introduction」を含め、全4章となります。

Theme1「日勝と鎬を削る」では、報告展に出品した日勝以外の作家を展示し、十勝画壇の中心としての日勝に焦点を当てました。報告展では、日勝と同じく全道展に出品していた村元俊郎、富谷道信らの名前があり、中でも徳丸滋と渡邊禎祥とは文通する間柄でした。この頃、十勝の教職員による「荒土美術会」が創立、地元公募展・平原社と並ぶ一大勢力となります。会員資格の無い日勝は、しかしよく荒土会展に顔を出し、寄稿文も寄せています。会員には前述の渡邊のほか、二科展に出品し入選していた武田伸一や園田郁夫らが居ました。日勝は徳丸との書簡で、十勝



画壇の作家たちの直近の公募展成績を報告しており、彼らを戦友として意識していたことが窺えます。

Theme2「日勝が十勝画壇から得たもの」では、日勝の作品を中心に展示し、前章を踏まえ、画風の変遷に注目しました。当時の十勝画壇は、各々が「一国一城の主としての気骨を持ち」、「上下の関係などは全然通用しない」、「傲慢な強気の激突だけがうずま」く場所*2。日勝も、突然鹿追を飛び出し、帯広で画家仲間と夜更けまで芸術論を闘わせることもあったといいます。議論の内容はさておき、日勝もその熱気に触れることで新たな視点を得たことは想像に難くありません。事実この頃の日勝の公募展出品作を見ると、「画室C」に見られる原色の多用や、「人と牛A」に見られる抽象表現の導入など、画風の変遷に試行錯誤の痕が見受けられます。日勝が出品した独立展以外にも、二科展やモダンアート展といった中央画壇へ挑戦する画家もおり、彼らとの交流は中央画壇の情報を間接的に得られる研鑽の場だったでしょう。

Theme3「能勢真美の系譜」では、北海道画壇の中心にして帯広移住後は十勝画壇に大きな影響を与えた能勢真美と、能勢に師事した画家たちの風景画、そして能勢の元で花開いた日本画家たちの作品を展示しました。日勝は帯広信金のカレンダー原画を10年契約で依頼され、1969年に「扇ヶ原展望」、1970年に「広尾海岸」を描いています。作家の死により途絶しましたが、帯広信金はその後も十勝の画家に原画制作を依頼しており、本章で展示した能勢や、長尾栄三らも選ばれています。

*本展を契機として

1967年の報告展出品目録に記載されている日勝の出品作は120号の油彩画「画室A」と、同じく「画室B」の2点です。日勝の作品名は作家

没後に整理されたため、一部に当時の名称と異なるものがありますが、長らく報告展では現在の《画室A》と《画室B》の2点が展示されたと考えられていました。

報告展のメディア報道のうち、会場写真に日勝の作品が写っているのは『十勝毎日新聞』(1967年2月23日付)と『広報おひろ』(1967年3月号) [図1] の2件です。写真を見ると、《画室A》の隣には《画室B》ではなく、《画室D》(北海道立帯広美術館蔵) [図2] が並んでいます。これまで《画室D》の初出は、報告展の四か月後に開催された「第22回全道展」(1967年6月) だと考えられていましたが、再現展を契機に2月時点で帯広にて発表されていたことが新たに分かりました。*3 (本展担当者：杉本 圭吾)



[図1]



[図2]

*1 以下、1967年に開催された「全十勝美術展」を「報告展」、その報告展を再現展示した2023年の展覧会を「再現展」と称する。
*2 神田日勝「帯広・十勝の絵かき達」『25周年記念全道展(図録)』、1970年。
*3 本展では、当時の会場写真を元に一部会場の再現を行い、「画室D」と類似した作例である《画室C》を展示した。

関連イベント

ギャラリートーク

- 第1回 参加者数：4名
- 第2回 参加者数：20名
- 第3回 参加者数：11名

美術講座

「十勝美術の青春時代～1960年代を中心に～」
日 時：7月16日(日)
講 師：薮部容子氏(北海道立近代美術館リサーチ推進課長)
会 場：鹿追町民ホール2階 ミーティング室
参加者数：26名



馬耕忌

第31回

今回の馬耕忌は、開館30周年記念展Ⅱ「神田日勝×岡田敦 幻の馬」展にあわせて、出品作家である写真家の岡田敦氏による講演会「“ユルリ島の馬”と“未完の馬”」を開催しました。

日時:2023年8月27日(日)
14:00~15:30
会場:鹿追町民ホール
ミュージカルホール
参加者数:95名



講演会抄録

演題「“ユルリ島の馬”と“未完の馬”」

司会:福地大輔 氏 (北海道立釧路芸術館学芸課長)



講師:岡田 敦 氏

□ 作家略歴 □

岡田 敦 写真家/芸術学博士
1979年北海道稚内市生まれ。大阪芸術大学芸術学部写真学科在学中に富士フォトサロン新人賞を受賞。東京工芸大学大学院芸術学研究科に進学し、博士号を取得。2008年“写真界の芥川賞”とも称される木村伊兵衛写真賞を受賞。2014年に北海道文化奨励賞、2017年に東川賞特別作家賞を受賞。2023年にユルリ島での10年余りにわたる活動の記録をまとめた書籍『エピタフ 幻の島、ユルリの光跡』を発表し、同作品にてJRA賞馬事文化賞を受賞する。

福地 今回の作品の舞台「ユルリ島」は北海道の根室の沖に所在します。根室にこうした自然が残されている島が存在することはなかなか知られていないと思います。島のことをご存じになったきっかけは何だったのでしょうか？

岡田 僕がユルリ島の写真を撮りはじめたのは2011年、興味を持ったのはその2年ほど前です。当時のユルリ島は道内でもまったく知られていない、地図上には存在しているけれど、実際には存在していないような島でした。僕は知人から「北海道の東の果てに馬だけがいる島がある」という話を聞いて、興味を持ちはじめました。けれど、当時は情報もなく、島が国の鳥獣保護区に指定されているので立ち入ることも禁止されていて、上陸の許可をいただくのに2年かかりました。

福地 昔は昆布漁で使われた島だったそうですね。

岡田 ユルリ島が昆布の干し場として使われはじめたのは戦後ですが、島に馬が持ち込まれたのは1950年ごろです。当時は今のような港もないですし、車も冷蔵庫も水もない時代。傷みやすい海産物では商売にならないので、乾きもので運びやすい昆布の干場として沖合のユルリ島が必要とされました。

それともう一つ、ユルリ島は周囲が崖に囲まれているので、その崖の上に昆布を引き上げるには人の力では到底無理。それで、馬を動力源として島に連れていったという背景もあります。馬がいなくては生活もできない時代や環境だったのでしょうか。

福地 無人島になってしまったのは1970年ごろ、ちょうど日勝が亡くなった年と同じです。岡田さんは馬の撮影を始めたのが2011年ごろだったので、そこから40年近い歳月が経過したわけですが、その間馬た

ちは完全に放っておかれて野生化している状態となったのでしょうか？

岡田 その後は人が手を加えることはほぼなく、雄馬が生まれたら近親交配をしないように間引きする程度でした。かつて馬と共に暮らしていた元島民の方たちが、馬のいる島を続けたかったのでしょうか。けれど、元島民の方も高齢になり、生まれた雄馬を間引きすることができなくなった。それで、2006年に雄馬をすべて島から引き揚げたそうです。雌馬だけを島に残して、このまま馬がいなくなるを見届けようと、元島民の方で話し合っただけです。

福地 こうした隔離された環境の島で生きている馬たち、ということばかり、厳しい環境にいる印象を感じてしまうのですが、岡田さんの作品の馬たちは、結構丸々として栄養状態が良さそうな感じの馬たちですね。



岡田 そうですね。僕も島に渡る前は、痩せこけた馬がいるんじゃないかと思っていたのですが、太っている馬たちがいたのでびっくりしました。

僕は当時、馬という生き物にあまり詳しくなかったのですが、とにかくユルリ島の馬の澄んだ眼が印象的でした。人が足を踏み入れてはいけない聖域に来てしまった……そんな感覚になりました。人間に嫌なことをされたことのない生き物の眼をしていました。ユルリ島の馬は警戒心があまりないですね。

最初に島に渡った2011年には馬が12頭いました。すでに絶えることが運命づけられた存在であったので、その馬たちの最後を見届けようと思い、写真を撮りはじめたのがきっかけです。芦毛(灰色の馬)が群れのリーダーで、僕はこの馬をメインに写真を撮ってきました。ユルリ島の馬の血脈を受け継いでいる子孫は残り2頭しかいないのですが、その

うちの1頭がその馬です。偶然ですが、メインで撮っていた馬が最後まで生きていたということも、ユルリ島の作品の在り方に影響を与えていると思います。

福地 馬を撮り続けた12年間で、表現上具体的に变化したことはありますか？

岡田 最初はポートレートのような意識で撮っていましたね。けれど、歳月を重ねることで作品を残す意味が変わってゆきました。

僕が島に渡って最初にするのは、馬の頭数を数えることなんです。当然、馬の数は減ってゆくので、馬がいなくなれば、その亡きがらを探します。そうしたことをしているうちに、ユルリ島で馬の写真を撮って、その姿をただ作品として残すことだけではなく、彼らがなぜそこに存在していたのか、その意義や歴史までも作品と一緒に残してあげたいと思うようになりました。

福地 今回、亡きがらが土に還っていく途中の馬の作品が印象的でした。

岡田 あの作品は、真冬の夜に一人で何時間もかけてあの馬を探していたときに、明け方になってその馬の亡きがらを見つけて撮ったものです。写真を撮りながら、なぜかふと日勝の《死馬》という作品を思い出しました。子どものときに日勝の《死馬》を初めて見たときは、日勝がどうして死んだ馬の絵を描いたのか、その意味や動機がわからなかったのですが、あの写真を撮っているときに、日勝の気持ちが少しだけわかったような気がしました。



僕も決して死んだ馬を撮りたくて、ユルリ島に通っているわけではなく、消えてゆくものと向き合うことで、その先に見えてくるものが何なのかを知りたくて始めた活動です。日勝も死んだ馬の絵を描きたかったわけではなく、その絵を描くことを通して、向き合いたいものがあったのだと思います。日勝の《死馬》の絵の隣に、ユルリ島の死馬の写真を並べたいというのは、今回の展覧会のお話をいただいたときに最初に考えたことですね。

神田日勝といえば「北海道を代表する画家」とよくいわれますが、もともとは東京で生まれた方で、戦火を逃れるために7歳のときに鹿追に入植しています。北海道に入植した頃の生活は、日勝にとって何もかも驚きだったと思うんですね。当時は飼っている家畜が亡くなれば、食べて供養した時代ですし、そういった東京では経験したことがなかったであろう日々の生活の中で、日勝にとっての大きな衝撃が、彼の死生観を育てていったと思うんです。逆にいうと、日勝が北海道で生まれていたら、《死馬》や《牛》は描けなかったような気がするんですね。

僕は北海道で生まれ育ったのですが、ずっと北海道で暮らしていたら、ユルリ島の写真はおそらく撮らなかったと思うんです。東京に出たからこそ、北海道の風土や特異性に気づいたわけで、そういった意味でも、作家が生まれた場所や暮らしている土地というのは、その作家の創作活動に大きな影響を与えているのだと思います。

福地 今回の展覧会ではお話しされた通り、神田日勝の作品と呼応・対比する形で作品を交互に展示されていると思います。

岡田 展覧会のお話をいただいてから、日勝の作品集を全部カラーコピーして、事務所の壁一面に張り巡らせて、何か月の間ずっと眺めていました。しばらくしてから、日勝の絵の隣にユルリ島の写真を加えて

いて、どういう展示構成にしようか考えはじめたのですが、どうもうまくいかない。やはり作家というのは、その年齢によって向き合いたいと思うものや、向き合えるものが決まっていて、若くして亡くなった日勝と今の僕との年齢差から生じるズレのようなものを埋めることが最初は難しかったです。それで、日勝が《死馬》や《牛》を描いていた20代の後半に、自分がどんな写真を撮っていたのかを改めて振り返ってみて、日勝と同じ年齢の頃に自分が撮った作品を加えてみたくて。そうすると、それまでバラバラであった僕の写真と日勝の絵が、急に呼応しはじめたような感覚が僕の中に芽生えました。

ユルリ島の写真だけではなく、僕が20代の頃に撮影した作品も展示の構成の中に加えることで、お互いが作品を作ることを通して向き合おうとしていたものがより明確に現れる。そういった意図もあり、赤く裂かれた腹が印象的な日勝の《牛》という作品の次に、腕に傷がある女性のヌードの作品を飾ったりしています。

僕は25年ほど写真を撮っていて、被写体は年齢によって変化していますが、その被写体を通して自分が向き合おうとしているもの、あるいは表現しようとしているものは、そんなに大きく変わっていないように感じています。像として現れるものが変化しているだけで、おそらく日勝もそういう作家だったと思うんです。だから、馬の絵を描いていても、ゴミ箱の絵を描いていても、彼の中で絵を描くことを通して向き合おうとしていたものが変わらなかったからこそ、それが作風として現れているのだと思います。今回の展覧会では、そうした作家の本質的なものが現れた展示になっていたらよいなと思っています。

福地 また、意図的に表現されているんじゃないかと感じたことがありまして、日勝の作品は非常に大地の褐色の色をベースにした作品が多いのですが、岡田さんの今回の馬のシリーズの中で“青”色を結構ベースにしている作品が多く感じられました。

岡田 もちろん意識しています。新しい作品を撮りはじめるときはどんな作品でもそうですが、どういう色がこの作品に適しているのか、どういうコントラストが良いのかを考えます。ユルリ島の馬は、僕が出会ったときにはすでに“絶えることが運命づけられた存在”であったので、暖色系の作品にはならないことはわかっていました。はかなくも美しい作品にしたいと思ったときに、やはり“青”と“白”という色はユルリ島の作品を作る上で重要なポイントとなりました。

福地 日勝は晩年に写実的な作風に回帰してゆき、未完の馬の作品につながっていったことが知られています。また、今スライドでお見せしました、日勝が描いた馬たちの姿を眺めると、神田日勝の作品にはデビューのときから最晩年まで常に“馬”の存在がありました。それが社会の移り変わりに応じて、日常の労働力からある意味で象徴的な存在に移り変わっていった、ということが見て取れるかと思います。

岡田 そうですね。僕は写真を撮るという行為は基本的に“永遠に対する憧れ”のようなものだと思っていて、永遠に続くものであれば撮る必要がない。消えゆくものであるからこそ写真を残すことに意味があるし、それがただの記録写真ではなく、芸術作品として残ることに新たな価値が生まれるのだと思っています。

例えば、今回のユルリ島の展示作品が10年後、あるいは50年後にどこかの美術館でまた飾られることがあれば、「無人島になぜ馬がいたのだろう？」ということに興味を持ってくれる人が現れるかもしれない。そんなふうに、ユルリ島や根室の歴史、北海道における人と馬との営みの歴史までもが僕の作品と一緒に残ってゆけば、それは僕の最初の動機が単にユルリ島の馬の命とただ向き合いたいということだけであったとしても、何かしら意味のあることにつながるのかもしれない。日勝の作品が彼の意図を超えて鹿追という町の歴史を語りはじめたように、僕のユルリ島の作品もそうになったらよいなと思っています。

※講演会の全文は4/1以降、当館HPで公開します。

開館30周年記念展Ⅱ

「神田日勝×岡田敦 幻の馬」

会期：2023年（令和5年）8月11日（金・祝）～10月28日（土）
会場：神田日勝記念美術館 入場者数：4,486名

主催：神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催：神田日勝記念美術館、神田日勝記念美術館友の会



関連イベント：
＊岡田敦オープニングトーク
日時：8月11日（金・祝）
14:00～15:00
会場：本展会場 参加者数：59名

開館30周年記念展Ⅲ

「第2回躍動する十勝の美術作家展」

会期：2023年（令和5年）11月1日（水）～12月10日（日）
※前後期で入替有

会場：神田日勝記念美術館 入場者数：1,373名

主催：神田日勝記念美術館
共催：神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会、神田日勝記念美術館友の会
主管：第2回躍動する十勝の美術作家展実行委員会
後援：鹿追町、鹿追町教育委員会、北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局

関連イベント：
＊オープニングセレモニー
日時：11月1日（水）9:30～10:00
会場：神田日勝記念美術館ロビー・本展会場 参加者数：51名
＊出品作家交流会
日時：12月3日（日）13:30～15:00 会場：本展会場 参加者数：23名

出品作家（五十音順/敬称略）
■前期：11月1日（水）～11月19日（日）
穴井亜紀子、飯森篤志、池田 緑、井出宏子、上田 薫、梅津美香、大崎和男、おおとひでお、奥秋広美、鎌田朝穂、神田絵里子、勾坂敏郎、佐々木裕二、佐藤真康、佐藤美和子、高田健治、千葉定是、寺沢秀明、中村富志男、東原こずえ、細木るみ子、宮澤克忠、森本憲司、山田洋子、山平博子、由良真一、渡邊禎祥 / 神田日勝（特別展示）
■後期：11月21日（火）～12月10日（日）
浅川 茂、浅野公宏、阿部安伸、池原良徳、和泉よう子、今西直人、小笠原洋子、金澤博子、近藤みどり、斉藤啓子、齊藤隆博、佐々木武信、さとうえみこ、篠田亜希子、白土 薫、瀧川秀敏、田之島鳥子、中西千尋、浜中マサノリ、松久充生、村上俊彦、村上陽一、森弘志、山元明、和田仁智義 / 神田日勝（特別展示）

開館30周年記念展Ⅳ

「十勝水彩作家展」

会期：2023年（令和5年）11月8日（水）
～12月10日（日）
会場：鹿追町民ホール ストニブレインホール
出品点数：41点

主催：神田日勝記念美術館
協力：十勝水彩作家展実行委員会



コレクション展Ⅰ

「神田日勝 未完のキャンバス Part2」

会期：2023年（令和5年）4月12日（水）
～6月4日（日）

会場：神田日勝記念美術館
出品作品数：神田日勝《静物（家・未完）》
（1970年）ほか館蔵品40点
入場者数：1,382名



十勝の大地に生きた青年画家・神田日勝（1937-1970）の代表的な作品を、当館収蔵品の中から「未完」の作品と「若き日」の歩みに焦点をあわせた展示構成で紹介する本展覧会では、当館のロゴマークでもあり、「半身の馬」として知られる代表作《馬（絶筆・未完）》にくわえ、亡くなる直前まで描かれていたと見られる未完の風景画9点を展示しました。

また、絵画制作を始めたばかりの時期に描かれた、若き日の作品群から出発し、画家として一歩ずつ歩みを進めていく様子を、彼自身がのこした言葉とともにその作品から辿りました。

（本展担当者：川岸真由子）

北海道出身の写真家・岡田敦（1979-）と、神田日勝の絵画とのコラボレーション企画展を開催しました。

在りし日は漁業の島として栄えるも、現在は無人島となった、根室半島沖に浮かぶ「ユルリ島」。かつて島民の生活を支え、いまは滅びゆく運命にある野生化した馬たちの姿をおさめた岡田の写真は、えも言われぬ幻想的な空気をまとうています。

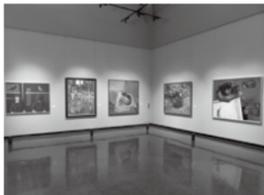
日勝もまた、戦後の鹿追で馬耕に勤しみながら過ごし、未完の馬の絵をのこして夭折しました。半身の姿で永遠に残された馬は、観る者の想像力を掻き立て、その幻の完成像を各々の胸中に抱かせます。

本展では、当館蔵の《牛》や北海道立近代美術館蔵の《死馬》など、日勝の絵画が並ぶ空間で、《Yururi Island 2017》など岡田敦の写真、合わせて36点を展示し、生きた時代こそ異なるものの、互いに人知れず失われてゆくものに目を向け、生きるということ芸術の根本的な問いに対峙する二人の「馬」たちの「邂逅」をご覧くださいました。

（本展担当者：川岸真由子、杉本圭吾）

神田日勝没後50年を記念して令和2年（2020年）に開催した「躍動する十勝の美術作家展」の趣旨を踏襲した本展は、独自のリアリズムを追求し十勝の美術活動の推進に奔走した神田日勝の志にちなみ、現在地元十勝において精力的に作家活動を展開する美術作家のうち、52名の作品を一堂に会するグループ展です。

会場には、油彩画や水彩画、版画、鉛筆画など、全52点が前後期に分けて展示されたほか、展示室2階では特別展示コーナーを設け、日勝の風景画9点を展示しました。

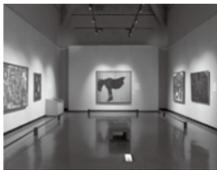


コレクション展Ⅱ×ミニ企画展

「日勝×〈文学〉」

会期：2023年（令和5年）12月13日（水）
～2024年（令和6年）4月21日（日）

会場：神田日勝記念美術館
出品作品数：神田日勝《馬（絶筆・未完）》
（1970年）ほか館蔵品33点
入場者数：725名（2024年3月31日時点）



神田日勝の夭折後、絵画あるいは作家自身をモチーフとした要素が作中に登場する小説や脚本、エッセイなどがいくつも世に出ました。その中には、内田康夫の『幸福の手紙』（1994年）など、日勝の絵画が、物語を展開させるための仕掛け、または物語に彩りを与える要素として用いられている作品のほか、NHK連続テレビ小説『なつぞら』（2019年）のように、日勝自身をモチーフにした人物が登場する作品も存在します。

本展ではこれら、言語によって表現される芸術作品を広く〈文学〉と位置づけ、日勝の絵画作品と〈文学〉との繋がりに注目しました。装置・仕掛けとして取り入れられた絵画作品がもたらす効果を考察し、〈文学〉作品の登場人物や物語内容の分析を通して画家のイメージ像に迫りつつ、実際の神田日勝作品との対比をご覧くださいました。

（本展担当者：杉本圭吾）

第29回 燕壑祭

日時：2023年6月17日（土）13:30～15:00
会場：鹿追町民ホール ミュージカルホール
内容：野瀬栄進ジャズピアノコンサート
参加者数：106名（事前申込制）

今回は、北海道出身であり現在世界で活躍をされているピアニストの野瀬栄進さんによるジャズピアノコンサートを開催しました。野瀬さんの情熱的な演奏で観客を魅了しました。



第21回 日勝祭

日時：2023年12月8日（金）18:30～20:40
会場：神田日勝記念美術館 展示室／ロビー
第1部 田中光俊氏によるギター演奏
第2部 懇親会
参加者数：47名

馬耕忌ゲストとしてお馴染みのクラシックギタリスト田中光俊氏によるギター演奏（「アルハンブラの思い出」、「禁じられた遊び」など）と、懇親会がおこなわれました。新型コロナウイルスの影響で中止が続き、4年ぶりの開催となった懇親会場に久しぶりの賑わいが戻っていました。

■感想ノートより

小学生まで鹿追に住んでいました。東京から来ました。大人になって改めて見ると感じられるものがたくさんありました。また、帰省の際に來ます。
（2023年4月2日）



緑の美しい十勝に千葉から来ました。日勝さんの力強くも繊細さ、そしてエネルギーがほとばしる絵画を見て涙が出そうでした。鹿追の宝ですね！ ありがとうございます。
（2023年5月17日 C）

十数年前、自分が小学生の頃描いた馬の絵。「馬の絵コンクール」で入賞し、金賞をもらった（たしか…）鹿追町のココ、神田日勝記念美術館に招待されたが、遠くへ行けなかった……。ようやく、今日来ることができた。表情、生命を絵と写真を通じ、感じる事ができた。ありがとう、鹿追。
（2023年10月17日 留萌在住）

ギリギリで来ることが出来ました。岡田さんの本を購入するか迷っていて、職場のSNSに、今回の展覧会の事が紹介されていて、来たいと思っていました。写真も神田さんの絵画も素晴らしかったです。コラボとしての展示がとても良かったと思います。
（2023年10月21日 札幌市 S）

※ノートにお名前を記載いただいている場合はイニシャルで表記しました。 ※SNSアカウント名は省略し、絵文字は「★」で表記しました。 ※誤表記と思われる部分は原文のまま表記しました。

出前講座・各種講演会

■茶道裏千家淡交会・北海道学校茶道連絡協議会第24回研修会
「神田日勝の絵画から学ぶ絵画鑑賞」

●2023年10月14日（土）14:30～15:20
●とかちプラザ・レインボーホール 195名 講師：杉本圭吾

学校連携実績

■北海道鹿追高等学校「英語科学習」
2023年4月25日（火）高校生19名、引率2名 合計21名

■鹿追町立鹿追中学校「美術科校外学習」
2023年6月1日（木）中学1年生40名、引率3名 合計43名

■北海道鹿追高等学校「英語科特別授業」
2023年7月20日（木）高校生8名、留学生11名、引率3名 合計22名

■札幌光星中学校「サマースクール教育旅行」
2023年7月29日（土）中学生68名、引率9名 合計77名

■鹿追町立鹿追小学校「社会科学習」
2023年10月12日（木）小学4年生35名、引率4名 合計39名

アート・キッズ・クラブ

●いずれも会場は鹿追町民ホール

- ①「ペーパーフラワーで花束を作ろう！」
- ②「昔の遊びでタイムスリップ？」
- ③「ヒンメリでクリスマスをいろうろう！」
- ④「手すきのしおりを作ろう！」

- 2023年5月13日(土) 参加人数: 15名
- 2023年7月8日(土) 参加人数: 11名
- 2023年12月2日(土) 参加人数: 9名
- 2024年2月17日(土) 参加人数: 6名

4回のプログラムを実施しました。事業を通して子どもたちからは、創意工夫する喜びや楽しさを感じる様子が伺えました。



子どもワークショップ

夏休み子どもワークショップ

「幸せを運ぶ馬♡ダーラナホースを作ろう」

- 2023年8月13日(日) ●会場: 鹿追町民ホール
- 参加人数: 15名 ●講師: 伊藤明美氏 (神田日勝記念美術館運営協議会委員)



スウェーデン発祥の伝統工芸品「ダーラナホース」の絵付けに挑戦しました。



鹿追焼の茶碗に、陶芸用転写紙を貼り付けたオリジナルお茶碗を作りました。

冬休み子どもワークショップ

「オリジナルおちゃわんを作ろう！」

- 2024年1月11日(木) ●会場: 陶芸工作館
- 参加人数: 26名 ●講師: 三上慶耀氏 (日本工芸会)

NEWS

2024年、釧路市立美術館と所蔵品交換展をします！

特別企画展

神田日勝記念美術館×釧路市立美術館

「コレクションが出会う道東」

釧路会場: 2024年4月27日(土)～6月16日(日)

鹿追会場: 2024年6月26日(水)～9月16日(月・祝)

神田日勝が出品していた北海道規模の公募展・全道展では、かつて十勝と釧路は同じ「道東支部」でした。図録の支部短信には日勝と並

んで、望月正男、柳悟、米坂ヒデノリら釧路の作家が「台頭者」として名を連ね、中には日勝同様、中央画壇への挑戦を試みた作家もいました。

釧路市立美術館では、全道展で日勝と鑄を削った作家の作品のほか、のちに十勝画壇の指導的立場となる寺島春雄、日勝にとって独立展の先輩である松樹路人、全道展創設メンバーであった国松登らの作品も所蔵しています。

漁業都市ながら異国イメージも有する、十勝と同じ「道東」釧路。豊かな自然の中

で生きる動物、漁港の風景に仮託された労働者、厳しい環境で人間に寄り添って生きる牛馬など、道東の絵画は十勝で営農しながら作品制作を続けた日勝の生き様や彼の作品とも相通ずるものがあります。

普段同じ会場に並ぶことのないコレクションが出会う「場所」で、釧路市立美術館の所蔵品と、当館の日勝作品との対比を通じ浮かび上がる「道東の美術」を通観することを試みます。

新収蔵品紹介 (寄贈作品)

神田日勝《静物》1969年 油彩、キャンバス 15.7×22.9cm 【画像1】

神田日勝《風景》1969年頃 油彩、キャンバス 15.7×22.8cm 【画像2】

以上2点、神田智子氏より寄贈

小笠原洋子《方舟の行方 (宙らわれて)》

2003年 油彩、キャンバス 162.0×130.3cm 【画像3】

以上1点、小笠原洋子氏より寄贈

神田一明《滞船》制作年不詳 油彩、キャンバス 38.0×45.5cm 【画像4】

神田一明《山の風景》1971年 油彩、キャンバス 38.0×45.5cm 【画像5】

神田一明《静物》1962年頃 油彩、キャンバス 119.0×93.0cm 【画像6】

以上3点、神田一明氏・羽賀夏子氏より寄贈



【画像1】



【画像3】



【画像5】



【画像2】



【画像4】



【画像6】